万物回復論と歴史的時間における悪：フョードロフ思想における過去帳

福 井 祐 生

1．序論――フョードロフにおける万物回復論

ロシアの宗教思想家ニコライ・フョードロフ (1829-1903) は，これまで地上に生を受けた全ての人間の復活と変容を万人の参加によって実現する共同事業を打ち立てた。共同事業においては，今は亡き父祖たちの記憶を司る失われた品々の収集を通じて，父祖たちの姿形を現実に再現することが求められている。即ち，フョードロフの共同事業においては，例外なき万人の追憶を通じて，普遍的復活が実現されるのである。

そのため，フョードロフ思想が万物回復論[1] の系譜を継ぐものであるということが度々示唆されてきた。フョードロフ自身は「アポカタスタシス」という言葉を用いていないし,「反キリストの救済 (спасение Антихриста)」には言及している[2] ものの，悪魔の救済にまでは言及していない。しかしフョードロフは,「ところで，多くの者たちにとって，世界の終末の条件性の問題自体，世界を救済されたものだと見做したいという願望までもがすでに異端である」と述べた上で，キリストが「世界の救い主」であることを指摘し，救い主は「ただ一人の破滅も望まず，万人が救われ，真の理性に至ることを望んでいる」(II, 50)と書いている。また周知の通り,「普遍的復活 (всеобщее воскрешение)」や「普遍救済 (всеобщее спасение)」という言葉を幾度とな

[1] 万物回復論とは，主に 2 世紀から 6 世紀にかけて東方キリスト教で形成された，終末における普遍的復活と変容を説く神学である。ギリシア教父オリゲネス (184/5-253/4) がその形成に大きく寄与するところとなった。この教義に従えば，悪魔や悪霊さえ救済の対象となり得た。6 世紀のパレスチナ修道士グループ間の紛争の結果，オリゲネス主義と共に異端として排除されたのだが，その後も東方の霊性には生き続けており，19 世紀末から 20 世紀前半のロシア宗教思想家たちにおいて再興した。万物回復論（アポカタスタシス）については，秋山学『教父と古典解釈―予型論の射程―』創文社，2001 年，Brian E. Daley, *The Hope of the Early Church: A Handbook of Patristic Eschatology* (Cambridge; New York: Cambridge University Press, 1991) を参照されたい。ロシアにおける万物回復論の展開については，例えば Aleksey Kamenskikh, "Origen in Russian Philosophy: From Gregory Skovoroda to Nikolai Berdyaev", *ΣΧΟΛΗ*, vol. 9, issue 2, 2015, pp. 446-59 を参照。

[2] *Федоров Н. Ф.* Собрание сочинений: В 4-х тт. М., 1995-2000. Т. 2. 1995. С. 49. これ以後，フョードロフ 4 巻本全集への参照は 巻数，頁数 と略記する（例えば II, 49 または (II, 49) と表記）。

く用いているだけでなく,「普遍救済の祈り」(II, 47-48) という祈りの言葉を創作している。さらに，フョードロフが度々引用する大祭司の祈り「すべての人が一つとなるように (Да будут все едино)」(ヨハネによる福音書 17:21)，あるいは「私たちと同じように，彼らが一つとなるように (Да будет едино, якоже и Мы)」(同 17: 22) という字句は，オリゲネスが，その主著『諸原理について』において，「万物の更新」（使徒言行録 3:21）と「神がすべてのものにおいてすべてとなる」(コリントの信徒への手紙一 15:28) という，まさにアポカタスタシスに関係する二つの聖書の記述と並べて引用している文言である。[3] フョードロフがこの大祭司の祈りを繰り返し引用することに，後世のフョードロフ受容者たちがオリゲネスとの繋がりを読み取っても何ら不思議ではないだろう。以上の様であるから，フョードロフ自身がアポカタスタシスという言葉を用いていないとしても，後世の研究者がフョードロフ思想に万物回復論を読み込むことは十分に可能である。

管見の限り，フョードロフの万物回復論に関する最も古い指摘としては，神学徒セルゲイ・ゴロヴァネンコによる「プロジェクトか象徴か？」(1915)[4] がある。また，アポカタスタシスという言葉を使わないまでも，ニコライ・ベルジャーエフは『自己認識』(1949) において,「N. フョードロフは普遍救済のパトスに貫かれていた」と述べている。[5] パーヴェル・フェドートフは,「終末論と文化」(1938) において，フョードロフによる黙示録への条件性の導入と修正された万物回復論の定式を一繋がりに述べている。[6] さらに，現代においては，ミヒャエル・ハーゲマイスター，スヴェトラーナ・セミョーノヴァ，ヴァレンチン・ニキーチン，アナスタシア・ガーチェヴァら，フョードロフ研究者による指摘がある。[7] その中でも最も詳細な説明を加えているのは，セミョーノヴァ「N. F. フョードロフの普遍救済の思想」(2008)[8] であるが，これ

---

[3] オリゲネス『諸原理について』小高毅訳，創文社，1978 年，130-131 頁。

[4] *Голованенко С. А.* Проект или символ? (О религиозном проективизме Н. Ф. Федорова) // Богословский вестник. 1915. Т. 2. № 6. С. 305. [http://www.nffedorov.ru/w/images/8/8f/Golovanenko_Proekt_ili_simvol_O_religioznom_proektivizme_Fedorova.djvu] (2019 年 9 月 8 日閲覧).

[5] *Бердяев Н. А.* Самопознание (Опыт философской автобиографии). М., 1991. С. 308.

[6] *Федотов Г. П.* Собрание сочинений в 12 т. Т. 7. М., 2014. С. 224-225.

[7] Michael Hagemeister, *Nikolaj Fedorov: Studien zu Leben, Werk und Wirkung* (München: Verlag Otto Sagner, 1989), S. 73; *Никитин В. А.* Учение Н. Ф. Федорова и главные христианские исповедания // Н. Ф. Федоров: pro et contra: В 2 кн. Книга первая. СПб., 2004. С. 755; *Гачева А. Г.* Проблема всеобщности спасения в романе “Братья Карамазовы” (в контексте эсхатологических идей Н. Ф. Федорова и В. С. Соловьева) // Роман Ф.М. Достоевского “Братья Карамазовы”: современное состояние изучения. М., 2007. С. 226–282. セミョーノヴァによる指摘については，下記注釈を参照。

[8] *Семенова С. Г.* Идея всеобщности спасения у Н. Ф. Федорова (в контексте христианской традиции

はフョードロフ思想全体を相手にした概説的な内容に留まっており，共同事業を形成する具体的な部分的教義――例えば，自然統御，博物館論，エキュメニズム論など――の側から普遍救済の論理を考察するものではない。

そこで本論文においては，共同事業における記憶の問題に焦点を当て，そこからフョードロフの万物回復論について考察したい。このテーマを選択する動機となったのは，万物回復論に対する批判の論拠として，歴史的時間の意味が問題とされることがあるということである。以下に引用したのは，ゲオルギー・フロロフスキーによるオリゲネス批判の文章である。

> アポカタスタシスは歴史の否定である。生成するもの全て，歴史的時間の全ての内容は消え去ってしまう，そして記憶も痕跡もなく雲散霧消してしまう。歴史の「後」に残るものは，歴史の「前」に既にあったものだけである。オリゲネスは，[…] 歴史と時間の現実性を少しも否定してはいない。オリゲネスは，ただ歴史の意味を否定したのである。[9]

これとほぼ同一の論拠によって，前述のゴロヴァネンコがフョードロフの万物回復論を批判している。ゴロヴァネンコは，人類の手による復活事業が単なる「同一的再建（тожественное возсозидание)」なのであって，それは「罪深き歴史，悪の歴史」をそのまま復活させることになるのではないかと疑問を呈している。[10] 実のところ，ゴロヴァネンコは，復活事業が万人と万物の変容を前提とするものであることを見逃し，変容の契機が欠如しているからこそ，復活事業には上記のような問題が付随すると誤解しているのである。[11] 実際はそのようではなく，復活事業とは人類が媒介となって神のエネルゲイアを世界にもたらす活動のことを意味するのであった。[12] それゆえに，ゴロヴァネンコの批判は空振りであるとも言えよう。

ただしフョードロフの場合，普遍救済の達成は，神による歴史的時間への介入，断絶（超越的復活）ではなく，キリストの下に結集した総体的人類による継続的な労苦（内在的復活，共同事業）の先にある。さらに，過去を生きた亡き父祖たちに纏わる品々を集めることが重要な課題であると見做されており，歴史的時間を切り捨てるど

апокатастасиса) // Н. Ф. Федоров: pro et contra: в 2 кн. Книга вторая. СПб., 2008. С. 904-926.

[9] *Флоровский Г. В.* Противоречия оригенизма // Путь. № 18. 1929. С. 109. [https://runivers.ru/lib/book4760/59427/] (2019 年 9 月 27 日閲覧).

[10] *Голованенко.* Проект или символ? С. 305-306.

[11] Там же. С. 307.

[12] フョードロフ研究史における大問題であるので，詳細な検討は稿を改めて述べることとする。差し当たり，筆者の見解を支持する記述として，例えば I, 401 を参照されたい。

ころか，今を生きる世代の意識の下に，過ぎ去った時間を積極的に取り戻すことが企図されている。万能なる神が，人間には理解できない力によって，歴史上の悪を乗り越えた全的調和をもたらすという物語を，フョードロフ思想に読み込むことは困難である。それゆえ，普遍救済という最終的目標に反する出来事――例えば，ホロコーストや大テロルなど――，それを為した人物をどのように扱うのかということが，やはり問題となる。

そこで本論文においては，次の問題を検討したい。すなわち，過ぎ去った時間の全てを我々の意識下へと積極的に取り戻しながら，例外なき万人の存在を肯定しなければならない時に，歴史的時間に生じた悪はどのように扱われるのか，という問題である。フョードロフは，ありとあらゆる分野の知や活動を司る「博物館」が，共同事業における中心機関としての役割を果たすことを想定している。その中でも，博物館にとっての大きな役割となるのが,「過去のあらゆる痕跡, 死者たちが自分の仕事, モノ，書類，日記，言い伝え，本，芸術作品に残した全てのごく小さな刻印を，収集，保存，研究する事業」[13] である。だが博物館論は，フョードロフに関する単著 [14] で言及されるのみならず，個別的な研究も，博物館学の立場 [15] や郷土研究の立場 [16] から，またプラトーノフ研究との関連 [17] に加え，その他の視点から [18] も幾らか提出されてい

---

[13] *Семенова С. Г.* Философ будущего века: Николай Федоров. М., 2004. С. 323.

[14] George M. Young, *Nikolai Fedorov: An Introduction* (Belmont: Nordland Publishing Company, 1979), pp. 120-123; Hagemeister, *Nikolaj Fedorov*, pp. 114-115; *Семенова.* Философ будущего века. С. 322-326.

[15] *Сорокин В. Н.* Русский философ Николай Федоров в поисках «музейной религии» // Философия образования. № 5 (38). 2011. С. 122-27; *Бонами З. А.* Незримый диалог: музейный проект Н. Ф. Федорова в контексте западноевропейской философии, музеологии и художественной критики // Московский Сократ: Николай Федорович Федоров (1829–1903). Сборник научных статей. М., 2018. С. 565-572.

[16] 飯島康夫「活動する観想者，ニコライ・フョードロフの生涯と郷土誌研究の構想—父祖の復活事業と郷土の理想的な地域共同体の構築に向けて—」『ロシア思想史研究』3 号，2006 年，117-144 頁; 4 号，2007 年，382-412 頁。飯島の研究は，マクロな視点から捉えられがちな共同事業をミクロな視点から再解釈しようとする画期的な試みであることを指摘しておく。

[17] *Чурич Б.* Крушение музея или о некоторых мотивах философии Н. Федорова в “Котловане” А. Платонова // Философия космизма и русская культура (Материалы международной научной конференции «космизм и русская литература. К 100-летию со дня смерти Николая Федорова», 23-25 октября 2003 г.). Белград, 2004. С. 245-249; *Гюнтер Х.* Философия памяти Н. Ф. Федорова // Философия космизма и русская культура. С. 165-75 (この論文の修正版が *Гюнтер Х.* По обе стороны утопии: Контексты творчества А. Платонова. М., 2012. С. 31-42 に収録されている).

[18] *Кукуй И.* Концепция вещественности Николая Федорова в контексте русской общественной и культурной мысли второй половины XIX века // Философия космизма и русская культура. С. 37-44; *Шестакова Л. Л.* Понятие *музея* в философии Фёдорова: лингвистический аспект // Литературный

る。そこで本論では，セミョーノヴァがこれまで普遍救済論に関連して断片的にのみ引用していた，フョードロフの論文「全地的親縁性再建の問題。親縁性を再建するための諸手段。公会」（以後「公会」と略記する）における過去帳論を詳細に検討し，死者たちを追憶することが普遍救済の事業において持つ意味を提示する。

2．教会と追憶――過去帳論

2-1．議論の前提

ロシア語で「過去帳」を意味する単語は「シノーディク (синодик)」であるが，この単語は，大きく分けて，歴史的に相互に関係する三つの意味を持つ。[19] フョードロフが「シノーディク」という言葉を用いる時に，真っ先に念頭に置いているのは，（1）死者たちの安息を願い、教会において捧げられる追憶の祈りのために，彼らの名前が記入された本 [20] のことである。ただし，この本がロシアに広まるきっかけとなったのが，これもまた「シノーディク」という名を冠した，（2）「正教の勝利」という儀式であった。[21] この儀式は，聖像画破壊運動に対する聖像画崇敬肯定派の勝利を記念して 843 年 (842 年とする文献もあり，フョードロフは 842 年を採用している) に創設されたものであり，異端者に対する「アナテマ」と正教の熱心な擁護者たちに対する「永遠の記憶」を宣言するものである。[22] これを受けて，フョードロフは正当にも，（1）の意味に（2）の意味を含め込みながら，「過去帳」に自らの解釈を与えている。すなわち，過去帳（＝追憶）から名前を除外することは，教会により「宗教的な死刑，永遠の死による罰として用いられていた」(I, 311) のに対して，過去帳にその名前が記入されることは,「永遠の記憶の保証であるだけではなく，教会の外部には救済がないことを認めるのであれば，救済の不可欠な前提条件でもあった」(I, 311) と纏めている。このように，フョードロフは，過去帳を「命の書」（ヨハネの黙示録 20: 12-15）のように見做しているのであるが，これはまた，ロシアの民衆に保たれていた信仰とも一致するも

журнал № 29: Материалы XII Международных научных чтений памяти Н. Ф. Фёдорова. М., 2011. С. 178-190 (ほぼ同一の論文として *Шестакова Л. Л.* Музей как часть проективно-утопического учения Николая Федорова: комментарий лингвиста // Лингвофутуризм. Взгляд языка в будущее. М., 2011. С. 157-168).

[19] 第三の意味は，本論に関わりを持たないので，ここでは取り上げない。

[20] Христианство: Энциклопедический словарь: В 3 т.: т. 2: Л - С. М., 1995. С. 575.

[21] *Романов Г. А.* О синодиках // Русский синодик. Помянник Московского Сретенского монастыря: Исторический справочник: К 600-летию Московского Сретенского монастыря. М., 1995. С. 17-19.

[22] Христианство. Энциклопедический словарь. Т. 2. С. 575.

のでもあったようである。[23]

また，19 世紀末から 20 世紀初めにかけて，過去帳の再興がロシアのあらゆる神学グループにおける議論のテーマとなっていた。実のところ，17 世紀に「民衆の本」としての地位を得てから 18 世紀にかけて，過去帳は，全ての教区付き教会に備え付けられていたのだが，その後は，徐々に朗読されることが少なくなっていた。[24]「公会」の論文において，過去帳に関する事実言明が，過去時制で行われるのもこのためであると思われる。フョードロフもまた，この過去帳の再興検討の議論に便乗する形で，過去帳の持つ性格について議論し，自らの共同事業のプログラムの中に取り込もうとしたようである。

2-2. 追憶の意味

そもそも「公会」の論文の端緒となっているのは，第二ニカイア公会議 (787 年) における聖像画崇敬肯定である。この聖像画もまた，死者の崇拝を意味するとされる。フョードロフは，イコンと過去帳とが一種の親戚関係にあると考えており,[25] 聖像画は，それを通じて，生者たちが死者たちのために神へと祈りを捧げるための媒介であるとされる。[26] それゆえに，第二ニカイア公会議が本当の意味で肯定したのは，実のところ「追憶」であった。この追憶がまた，救済の問題と結びつけられる。

> 最後の公会は，記念碑の保存，父祖たちの記憶を非難したのではない。反対に，それは，**追憶**を至高の法にまで高めたのである。というのも，宗教そのものが，全ての死者の帰還に関する，全ての生者の総体的な祈りだからである。(I, 311――強調は原文斜字)

---

[23] *Романов.* О синодиках. С. 19.

[24] Там же. С. 19, 24.

[25] 古代教会において過去帳の役割を果たしていた，主にパピルスや木で作られた二枚組の板 (диптих) には，その発展の過程において，殉教者，聖人，皇帝たちの名前が，その没年と共に書き入れられるようになっていった。それにより，この二枚組の板には，その日毎に祝賀されるべき聖人が示された教会暦 (святцы) のような性格が付与されるようになった。(*Романов.* О синодиках. С. 16-17) フョードロフは，このような過去帳と教会暦との親子関係に加えて，「聖堂とその中にあるイコンは，教会暦の外的表現である」(I, 311) とも考えているため，彼の思想体系においては，イコンにもまた――直接的または間接的に――死者たちの追憶という意味が付される。

[26] イコンは，博物館思想との関係において，端的に亡き父祖たちの姿を描いたものとして扱われることもある。その集積である「顔の書かれた過去帳」は，「博物館のイコノスタシス」とも呼ばれている。(I, 73, 319)

> 公会は，絶対的な聖人を認めなかった――もしも認めていれば，彼らは神々であったということになろう。しかし，まさにこのことにおいて，聖像画崇敬者たちは告発されもしたのである。しかしながら，公会は，絶対的な罪人もまた認めることがなかった。それ［誰かを絶対的な罪人であると断罪すること――筆者註］は，おそらく，死者たちのための祈りを否定することによって，聖像画破壊者たちが望んだことであろう。(I, 311)

ウラジーミル・イリインは，正教会が死者たちの追悼に際して最後に宣言する「永遠の記憶」という言葉について考察している。イリインによれば，記憶は，生命と神を意味している。人間存在を含めた万物は，神によって憶えられ，名を呼ばれる限りにおいて存在する。だから，教会共同体をなす人々は，自分の兄弟がどれほど卑しく堕ちたとしても，むしろその時にこそ，彼のために神の名を呼び，神が彼を憶えているようにと祈るのだとイリインは言う。[27]

そしてフョードロフにとって，宗教とは，全ての生者による全ての死者の追憶である。この追憶としての宗教を肯定することは，どんなに罪深き者と見えようとも，絶対的な悪の体現者として彼を排除し，「宗教的な死刑，永遠の死による罰」(I, 311) へと陥れることの否定を意味する。つまり追憶は，全ての死者を対象とした祈りであって，如何なる罪人に対しても，その救済への扉を開くことができるものとして描かれている。

2-3. 全地的な過去帳――追憶の包括性

フョードロフは，過去帳が一般に，全地的な意味を持つことを指摘する。全地的であるとは，過去帳における追憶が人類全体を包括することを意味している。

> なぜならば，過去帳というものは，真に全地的な公式によって始められるからである：「思い出してください, 主よ, アダムの時から我々に至るまで, 今は亡き全ての者たちを」，即ち「万人について，万人のために」。(I, 311)

過去帳には，ただ近親者の名前が書き入れられるだけではない。その初めに，人類の始祖であるアダムとイヴの名が追憶される。この二人は，旧約聖書の創世神話によれば，最初に罪に落ちた者たちである。フョードロフは，それゆえに，アダムとイヴ

---

[27] *Ильин В. Н.* Вечная память как дело Божие и вечное забвение как орудие князя века сего // Вестник РСХД. 1951. № 4. С. 2-8.

の後には，兄弟殺しのカインと，その子孫で二人の（つまり，複数の）妻を娶ったレメクから，イエスを死に追い込んだヘロデまで，そこからまた我々に至るまで，全員が数え入れられて然るべきであったと述べている。フョードロフは，原則的に，全ての人間が父祖たちの犠牲の上に生きる罪人であると考えているのだから，ここでは，まさに人類を構成する全員のことを指していると言ってよいだろう。しかしそれと同時に，過去帳は，様々な事情において，とりわけ追憶の祈りを必要とする者たちのためのものであるとも言われている。

> というのも，過去帳は，聖人たちのリストではなく，その者たちのための祈りを必要とする者たち，とりわけ，そのような祈りを最も必要とする者たちのリストだからである。(I, 311)

> 過去帳が，それはただ感情に従ってのみ［可能］なのだが，真に全地的な性格を獲得するのは，あり得るべき全ての種類の死，すなわち，監獄に捕らわれた者たち，樹林や沼や密林で道が分からなくなった者たち，雷に打たれた者たち，飢えや寒さから亡くなった者たち，魚に食いちぎられてバラバラになった者たち，**その名を誰も思い起こすことがないような者たち**が数え入れられる，いわゆる共同の記憶においてである。(I, 312――強調は原文斜字)

フョードロフは，聖人たちを過去帳による追憶から排除すると言っているのではない。第一に，聖人もまた人間であるからには，罪を免れ得ぬ存在である。第二に，より重要なことに，聖人は，教会において，当然に追憶されるべき存在だからである。さらに，教会信徒の近親者もまた，追憶の儀式が行われる日には，各々の教区で追憶されることになるだろう。しかし，とりわけ重い罪を犯したと見做されて教会から排除された者たちや，人知れず死を迎えた無名者たちは，教会で追憶されないままになっている。彼らを除外と忘却から救い上げ，追憶の輪に数え入れることこそ，ここでフョードロフが意図していることである。その追憶は，繰り返せば，救済への扉を開くものであった。

これに関連することだが，フョードロフは，一なる人類が，神による最後の審判の結果として，天国における至福に安らう者たちと地獄で永遠の苦しみを被る者たちに分けられることを，人類全体に対する罰に等しいと考えている。永遠の苦しみを被る者たちはもちろん，天国で安らう者たちもまた，地獄で苦しむ者たちを目の当たりに

することによって苦しむことになると言うのである。永遠の苦しみを眺めるという罰が極めて重い罰たることは，至福の運命を授けられた者たちが，義人たればなおさらであろう。

> もしも普遍救済が達成されなければ，罰は普遍的なものとなる。[…] 一方の者たちが永遠の苦しみによって罰され，他方の者たちはこの苦しみを眺めるという罰を受ける。 (II, 129)

そもそもフョードロフは，人類の普遍救済を志向しながらも，マタイによる福音書25章31-46節に示されるような，キリストによる最後の審判の可能性を否定していない。フョードロフは，このような終末を「超越的復活」(I, 180, 402) と呼んでいる。しかしながら，フョードロフの考えによれば，ヨハネの黙示録における終末の預言や上記のような福音書の記述は，決して無条件的に実現が予定されるものではなくて，人類がこれまでに犯してきた罪を悔い改めて，能動的な「内在的復活」(I, 180, 402) の道を歩むことで，その実現が回避されるような警告，あるいは神による人類の教育的手段であると解釈される。そのことを確証づけるため，フョードロフは，ヨナ書に示されるように，ニネヴェの民が悔い改めたことによって，神がニネヴェの破滅の預言を取り下げたことを例に挙げる。そして，ヨナ書の神が黙示録の神でもある限り，預言の条件性は，世界の終末を描いた黙示録の預言にも適用されると言うのである。神による怒りの超越的復活が人類全体を断罪することになるのか，人類がその総体において救済を達成することになるのか，それは我々自身が今行う選択にかかっているのだとフョードロフは警鐘を鳴らしている。[28]

しかしながら，人類だけではなく，教会共同体までもが普遍的復活事業の道を歩んでいないというのが，フョードロフの眼に映る現状である。フョードロフは，キリストのからだである教会が，自己の純化のために成員を破門することによって，反対に自己を不完全なものにしていることを指摘する。

> 破門するのは簡単になった。なぜならば，教会は，自らから諸成員を切り捨て，自らを片輪としながらも，痛みを感じることがなく，自らが不十分であることに気付かないほど，

[28] 以上の終末論の条件性の議論については，「世界の終末に関する預言の条件性について」(II, 49-51) というフョードロフの有名な小論，及び，この問題について議論した，小俣智史「フョードロフの終末論」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第二分冊』第53号，2008年，201-13頁を参照。

感情を失ってしまったからである。(I, 354)

フョードロフは，全地的であるはずの過去帳が，実のところ，全地的な追憶という役割を果たしていなかったことに気付いている。過去帳の意味が問い直される時代において，フョードロフは，それが本来的には，破門された罪人たち，名前を忘れられた無名者たちをも含めた，全ての死者を追憶するための媒介であることを説いているのだ。

2-4. 研究としての追憶の祈り——イスカリオテのユダを例に

しかしながら，とりわけ罪人に対する追憶の祈りは，彼に対する赦しを前提とする行為である。フョードロフが述べるように，破門の方がずっと容易であろう。それにも拘らず，彼は人類に対して，狭き道を歩むことを呼びかけて止まない。

そこで，フョードロフが議論の俎上に挙げるのは，イエスを裏切ったイスカリオテのユダである。宗教が全ての死者に関する全ての生者による総体的な祈りであるならば，ユダもまた除外されてはならない。信徒たちが持つ感情と追憶のあるべき普遍性とをどのように和解させるのか。

この問題を解決するため，フョードロフは，スヴェトラーナ・セミョーノヴァが言うように,「理解することは赦すことである (понять – простить)」という原則に立つ。[29] フョードロフは，罪人とされる死者に関する研究を，追憶としての祈りを構成する一部とし，この死者が罪を犯した背景を理解することによって，彼を彼が犯した罪から切り離し，総体的な追憶の祈りの内部に留めることができると考えている。

> 研究は，理性の活動として，**魂全体の発露，その全ての能力の発露**，感情と理性の発露である祈りの中に加わる。そして研究は，罪人であると認められる者たち，破門された者たち，聖くない者たち一般を浄化する祈りの構成部分でもある。研究は，裏切り者のユダでさえ，地獄，奈落の奥底に置いておかなかった。ユダを義なるものとすることは，最後の罪人を義とすることである。(I, 312——強調は原文斜字)

実のところ，このようなアイデアの基となる研究が存在している。それは，フョードロフ自身が言明しているように，ミトロファン・ムレトフが，1883 年の『正教評論』

[29] *Семенова.* Идея всеобщности спасения у Н. Ф. Федорова. С. 922-923. これ以後，引用を挟んで次の段落におけるムレトフの論文の紹介までは，セミョーノヴァが既に行なっているところである。

に発表した「裏切り者のユダ」という論文である。ムレトフは，福音書や新約聖書外伝のユダに纏わる記述を読み解くことを通じて，ユダのイエスに対する裏切りが名誉欲や金銭欲に端を発するという短絡的な判断を退けた上で，実際のところ，ユダヤ教的な信仰心の発露によるものではないかと主張している。[30] つまりフョードロフは，ある人物に関する現存する資料や今後収集される資料の全てを分析，検討し，その人物の具体的な姿のみならず，当時抱いていた感情までもできる限り完全に再現するという「研究」によって，その者が当時取った行動の理由，罪を犯さざるを得なかったことの背景を明らかにすることができると考えているのである。

この追憶の祈りの一部をなす研究によって，罪人とされる人物の内的深奥を明らかにすることができるという可能性が残る限りは，彼を犯罪者として断罪することはできない。すなわち，絶対的な罪人というカテゴリー自体が事実上否定される。このような罪の正当化可能性により，人は，自分が思い出したくもないほど憎悪する他者を追憶することができるようになるとも言えるだろう。この追憶は，翻って，他者をその罪から切り離すことによって，彼の存在を義なるものとし，教会共同体へと取り戻す力を持つ。このようにして，万人における相互的且普遍的，即ち全一的な赦しが実現されるという可能性が生じる。

ここで注意しておく。フョードロフ自身は明確に言及していないのだが，彼の教義体系全体を踏まえて考えると，歴史研究によって罪人から罪が切り離されても，それは，彼を受け容れることが可能になったというだけなのであって，彼に救済が保証されたということを意味しない。彼は救済への道を開かれたに過ぎない。彼は，全ての他者と共に，総体的人類による共同事業へと参加し，自分たちの生命を基礎付けてくれた父祖たちを復活させることで，自らが犯した罪を贖わなければならない。[31] それは，罪を犯した者自身が一番深く自覚していることであろう。先述したように，フョードロフ思想においては，絶対的な罪人などは存在しないはずである。

---

[30] *Муретов М.* Иуда-Предатель // Православное обозрение. № 9. 1883. С. 37-82.

[31] フョードロフは，キリスト教正統信仰における「贖い」という言葉を再解釈して用いている。その再解釈が非常に分かりやすく表れているのは，フョードロフがパウロによる「コリントの信徒への手紙一」を引用している箇所である。フョードロフは，この箇所において，同書 15 章 21 節「死が一人の人を通して来たのだから，死者の復活も一人の人 (человек) を通して来たのです」を文字通り引きながらも，キリストを意味する「一人の人 (человек)」を「人類 (человеческий род)」に変えて解釈し，「神の計画によれば，贖いは人類を通して行われねばならない」(I, 281) と述べている。

2-5. 歴史的時間の変容

以上に関連して，フョードロフは過去帳を，聖なる天地創造の歴史に世俗史を一致させるための媒体として位置付けているように思われる。フョードロフによれば，歴史の教科書で習う世界史は，例えばナポレオン 1 世のような，非同胞性を代表する人物，戦争をする者，蜂起する者，破壊兵器や生産機械の発明者などを称賛するものである。しかし，過去帳の描く人類の歴史は，上記のように，罪人をも無名者をも含みこむ全的包含性を特徴としている。それが，戦争，蜂起の指導，新技術の発明による自然淘汰や性淘汰の促進など，他者を排除することを積極的に描く世俗史と対立することは必至である。とはいえ，こうした人物を歴史から排除することも，過去帳の望むところではない。過去帳は，罪人たちが再び教会共同体へと帰還し，総体的人類において共にこの世界を再創造するという，新たな歴史的時間を歩んでいくための手助けをするべきものである。

> 過去帳は，単なる追憶ではなく，罪人たちを義なるものとし，彼らを贖うという意味において，天地創造の歴史を世俗史と和解させる。(I, 313)

セミョーノヴァが整理するように，フョードロフは，なるほど，自然淘汰，性淘汰，自然搾取など現在まで続く地上的秩序の現実である「事実としての歴史」と，キリストの下に結集した人類による死との闘争，死者たちの復活という未来を描いた「プロジェクトとしての歴史」を対比している。[32] しかしながら,「事実としての歴史」と「プロジェクトとしての歴史」は，時間軸上のある一点を区切りにして，前者から後者へと移行するものと考えることはできない。これまで「事実としての歴史」と見做されていた歴史的時間は，過去帳を媒体として,「プロジェクトとしての歴史」へと意味付けし直されてゆく。

復活事業においては，全ての人間が一度に復活されることが想定されているわけではない。最初は，死んだばかりの者を復活させることから始まり，次に復活させられるのは，あまり腐敗が進んでいない者である。こうした経験の漸次的な蓄積によって，さらに続く復活事業の歩みは促進されてゆくのみならず，復活させられた父祖たちはより古い時代についての語り部でもあるから，彼らの協力によって，人類の持つ知の総体はますます完全なものになる。[33] これに伴って，人間の身体の変容，宇宙全体の

---

[32] *Семенова.* Философ будущего века. С. 297.
[33] I, 291.

調和もまた，次第に完全なものとなっていくことが予想されるだろう。このようにして，総体的人類は，より新しい世代からより古い世代へと，漸次的に人類全体を復活させていくことが期待されている。そしてフョードロフの考えによれば，歴史的時間とは，つまるところ，その時間を生きる人々に他ならない。[34]

すなわち，一方において，過去帳による追憶が「事実としての歴史」を「プロジェクトとしての歴史」として意味付けし直していくのと同時に，実際に父祖たちを復活させていく歩みが，単に追憶されるものとしての歴史ではなく，人類の生きてきた時間そのものをも変容させていくことになると言えるのではないだろうか。

3．結論

本論文では，フョードロフが，過ぎ去った時間の全てを我々の意識下へと積極的に取り戻しながら，万人の復活を達成することを企図する際に，歴史的時間に生じた悪が如何に扱われるのかという点を問題にした。本論文の独自性は，第一に，共同事業を形成する部分的要素の側から，普遍救済の論理を明らかにしようとしたことである。第二に，これまで断片的にしか取り上げられて来なかった過去帳論を詳細に検討したことである。

その結果として明らかになったのは，第一に，フョードロフ思想が持つ徹底的な非排除の精神であろう。過去帳による追憶は，重い罪を犯したと見做されて教会から排除された者たちをも対象としなければならなかった。フョードロフは，自己の純化のために諸成員を排除し続けている教会の現状を厳しく批判している。第二に，これはセミョーノヴァが指摘するところだが，知的努力による悪の克服（「理解することは赦すことである」）であろう。本論文で確認したように，フョードロフの考えでは，聖像画と共に追憶を肯定したキリスト教は，絶対的な罪人の存在をそもそも認めていない。フョードロフは，悪を認めないわけではなく，悪を絶対視することに反対するのである。[35] 第三に，過去帳をはじめとして，共同事業のプログラムは歴史的時間を変容させるものだということである。過去帳は，怒りや憎しみに満ちた過去を意味付けし直す。復活事業は，総体としての人類の現在における労苦によって，歴史を成してきた生命そのものを神化させる。それは，現在から過去と未来に向かって，聖なる時間を徐々に広げていく活動ではないだろうか。

本論文では，自然における悪の問題や，フョードロフの歴史観など，議論の及ばな

[34] 例えば，フョードロフによるカント批判「2 つの理性の問題について」(II, 94) を参照。
[35] I, 42-43.

かったところも多くある。しかしながら，人間の怒りや憎しみを巻き起こす人間の罪という問題に，フョードロフがどのように応答しようとしたのかということは描写できたのではないかと思う。ここに検討できなかった上記のような問題は，筆者の今後の研究課題とさせて頂きたい。[36]

Идея апокатастасиса (всеобщего восстановления) и зло в историческое время: синодики в мысли Н. Ф. Федорова

ФУКУИ Юки

В данной статье рассматривается проблема зла в историческое время в общем деле Н. Ф. Федорова, в котором человеческий род должен достичь всеобщего воскрешения с помощью восстановления в нашем сознании всего забытого прошлого. Для обоснования постановки этого вопроса мы поддерживаем исследования нашими предшественниками идеи апокатастасиса в учении Федорова, а также ссылаемся на осуждение Г. В. Флоровским Оригена, одобряющего всеобщее спасение, но не учитывающего смысл истории, и на критическое принятие С. А. Голованенко религиозного учения Федорова.

Одна из особенностей нашей работы состоит в том, что мы стараемся объяснить логику всеобщего воскрешения на основе одной из составляющих всего общего дела. В данной статье мы сосредоточиваемся на роли памяти, точнее, поминовения в воскрешении. Кроме того, наше исследование отличается также тем, что для исследования данной области в мысли Федорова мы подробно разбираем его малозамеченное учение о синодиках в его статье под названием «Собор».

В нашей работе продемонстрирован, во-первых, безусловный отказ Федорова от всяких исключений. Поминовения с помощью синодиков должны включать и отлученных от церковного общества, которые считались совершившими тяжкий грех. Во-вторых,

[36] 本研究は JSPS 科研費 JP18J13645 の助成を受けたものである。

согласно с указанием С. Г. Семеновой («понять – простить»), мы нашли преодоление зла через умственные усилия во всестороннем исследовании как составной части поминальной молитвы. В данной статье мы также утверждаем, что христианство, по мысли Федорова, подтвердившее значение поминовения вместе с иконами, отрицало возможность существования безусловных грешников. В-третьих, общее дело в целом, в том числе и поминовение с помощью синодиков, преображает историческое время. Синодики переосмысливают «историю как факт» в «историю как проект», а воскрешение восстановляет составлявшие прошлое время человеческие существа в преображенном виде через совокупный труд человеческого рода в настоящем.

В конечном счете, хотя остаются еще не рассмотренные нами проблемы, мы считаем, что в данной статье убедительно описывается один из тех путей, по которым Федоров решает проблему зол, принесенных людьми в историческое время.